

戦後日本文学とアメリカ

報告 柴田勝二

日時：二〇一四年一月二三日（土）一三時三〇分～一七時

場所：AA研大会議室

発表者：加藤典洋（文芸評論家）

千石英世（文芸評論家）

マシュー・ストレッカー（ウイノナ州立大教授）

柴田勝二（東京外国語大学教授）

司会：加藤雄二（東京外国語大学准教授）

本シンポジウムは柴田の科研（基盤C、24520207、共同研究者加藤雄二）を主体とし、戦後日本文学と〈アメリカ〉との関係について考察することを目的として、文芸評論家の加藤典洋氏、千石英世氏と、アメリカの現代日本文学研究者であるウイノナ州立大学教授のマシュー・ストレッカー氏を招いておこなわれたものである。

『アメリカの影』や『敗戦後論』などで、アメリカの強い政治的、文化的影響下のもとで進んでいった戦後日本が抱えた問題を鋭く摘出した加藤氏は、田中康夫『33年後のなんとなく、クリスタル』、赤坂真理『東京プリズン』、百田尚樹『永遠の0』という近年刊行されて話題となった三つの作品を取り上げ、そこに八〇年代の日本文学を覆っていた「アメリカの影」

が払拭されている一方で、日本の「戦後」は未だ終わっておらず、むしろ日本や日本人の尊厳を遡及的に取り戻そうとする傾向が見られることを指摘した。『東京プリズン』と『永遠の0』では戦争や天皇を肯定的に位置づけることで、現代に至る「戦後」を書き替えようとする傾向が顕著に見られる。これらは近年顕著になってきた「日本を取り戻す（Take back Japan）」風潮の反映としても捉えられ、ここでは「敗戦後」の枠組みを強く引きずっているとともに、アジア諸国とその民衆への軽視が見られるということであった。

千石氏は、モンテーニュなど懐疑論を代表する思想家を座標軸としながら、アメリカの作家ウィリアム・フォークナーやハーマン・メルヴィル、戦後作家小島信夫などを議論された。アメリカ合衆国は民主主義を基本理念として成立してきた国家であるが、民主主義に対する懐疑的な姿勢もまた一般的であったことを指摘された。フランスの政治家、政治思想家アレクシ・ド・トクヴィルは、一九世紀前半にアメリカに渡り、各地を見聞した経験から『アメリカのディモクラシー』を著したが、アメリカの民主主義を手放して賛美しているわけではなかった。一九世紀アメリカ作家ハーマン・メルヴィルもまた、エルサレム巡礼を題材とし、世界史的ヴィジョンを提示する長

編詩『クラレル』などにおいて、民主主義への批判や懐疑的見解を明確にしている。さらに同様の懐疑がアメリカ南部を代表する現代作家であるフォークナーや、『アメリカン・スクール』などの作品でアメリカの影響下に置かれた戦後日本を描いた小島信夫などにも共有されていることが語られた。

村上春樹の研究者であるストレッカー氏は、最近三冊目の村上論 (*The Forbidden Worlds of Haruki Murakami*) を上梓したこともあって、村上春樹の作品世界を対象とする発表であった。村上の世界では登場人物が日常世界から非現実性を帯びた他界的時空に入り込む展開が多く現れることを指摘した後、人間が内にはらんだ他界としての無意識世界との交わりが村上作品を特徴づけている様相が、様々な作品を例にとって語られた。ストレッカー氏によれば、村上的な無意識はフロイトよりもその弟子であったユングのそれにより近いものであり、人間を個の枠組みから解き放って他者との連携をもたらす契機として位置づけられているということであった。

最後に柴田が、日本在住のアメリカ人作家であるリービ英雄の『千々にくだけて』を対象とする発表をおこなった。リーの主人公は多くの場合作者自身の来歴を反映して、日本にもアメリカにも帰属意識を持たず、〈日本語〉という言語を自身の住み処とする人物たちだが、この作品ではリービが帰国の途上で二〇〇一年九月一日に勃発した同時多発テロ事件に遭遇した経験素材として、アメリカにも帰れず日本にも戻れないという状況に置かれた主人公の境遇と心理に重ねる形で、このアイデンティティーの曖昧さという主題が浮き彫りにされている。さらに『千々にくだけて』には、「ワシントンの権力」

への距離感から日本語に関わり始めたリービが抱くマイノリティとしての意識から、アメリカの覇権主義への抵抗としてテロ行為を起こしたムスリムへの秘かな共鳴が見出され、そこに冷戦終結後の世界への批判を見て取ることができるという主旨であった。

四人の登壇者の発表がそれぞれやや長くなっただけであって、聴衆からの質疑の時間は十分に取ることができなかったが、主に留学生の院生を中心として、文学の歴史的研究と文化的研究(カルチュラル・スタディーズ)の差違(加藤氏へ)や、村上春樹の世界に繰り返し現れる「井戸」と「無意識(イド)」との関係(ストレッカー氏へ)などへの質問が出され、登壇者からそれぞれ丁寧な説明がなされた。現代の代表的な評論家、研究者を招いてのシンポジウムであったが、聴衆は最後まで熱心に発表と質疑に耳を傾けており、現代日本とアメリカとの関わりを考えるための貴重な機会となったといえるだろう。